

第四十六章 結束した女

宇宙戦艦から時空間移動装置で急遽、榊が特急ウク・ライナーに乗りこむと運転室に向かう。思ったより広い運転室でイリがワンハンドルやコントロールパネルをいじっている。長老が握手を求めるが榊は無視してイリの肩を叩く。

「ちよっと待て！」

イリが振り返ると笑顔で応える。

「電車の運転って結構簡単なのね。まず自動車のようなハンドルがない。あるのはアクセルとブレーキを合体させたスライドハンドルだけ。非常にシンプルだわ。しかも特急はいつも優先順位ナンバーワン。武装車両の使用に専念できるわ。さあ！ クリーム半島に向けて出発進行！」

「ちよ、ちよっと待つんだ」

榊はイリの勢いに押される。とても助言できる状況ではない。すでに長老の方は諦めているらしく榊にささやく。

「イリ様がこのモードに入ればノロ様がいってもお手上げですじゃ」

榊もイリの性格を知り尽くしている。しかし、ここは一言挟むことにする。

「この戦争を終結させるのが目的なら宇宙戦艦や加藤ハヤブサ宇宙戦闘機隊を出動させれば一時間もかからない」

すぐイリが反論する。

「地球の問題である以上あくまでも地球にある道具で解決すべきです」

「道具？ 武器じゃないですか。武器に生まれ故郷はありません。武器と言うものは目的しか持っていない。相手を殺すという目的です」

榊が食い下がるとイリの表情が一瞬歪む。そこに全身真っ黒な車掌が入ってくる。

「先ほどダレデモスキー大統領から特急ウク・ライナーの運転免許をイリ女王に与えるとの許可が出ました」

イリが前方を指さす。再度号令する。

「シュッパーツ（出発）、シンコー（進行）！」

特急ウク・ライナーは何カ所かのポイントを経由して本線に入る。最後尾の車両が本線に入線したのを確認するとイリは一気に速度を上げる。今やイリは鉄道女子の親分のような存在だ。

「ピーーツ」

警笛を残してあつという間に特急ウク・ライナーが走り去る。

*

自動運転にしてイリは振り向くが先ほどまでいたはずの車掌がない。

「どこへ行ったの」

「客室です。車掌だから当然でしょ」

榊が首をすくねながら答える。

「誰も乗っていないのに？」

「いいえ。満員です」

「えっ。誰が乗っているの？」

今度は長老が答える。

「兵士です。それも精鋭部隊です」

「いつの間に？ 何も聞いてないわ」

「イリ様が招集したのですぞ。まさかお忘れになったのでは。爺やのようにボケるには若すぎますぞ」

榊が追加する。

「女だけの独裁国家を作ると言ってたじゃないか」

まだイリは飲み込めない。

「イリ様の発言がウクライナー人に広がって賛同した若い女性が志願したのじゃ。独身、あるいはこの戦争で子どもを失った母親たちが武器を持って集結したのじゃ」

「そんなつもりで言ったわけでは……」

イリがうろたえると長老が叱る。

「そんな弱気では独裁者になれませんぞ」

そのとき榊が運転席から出て行くこうとする。

「どこに行くのですか」

「ウクライナの女性は美人が多い。それで……」

「許可しません」

「決して下心はありません。戦闘の心得を……」

「あなたはいつの間にノロミたいにスケベーになったのですか。見損ないました」

イリが榊の横をすり抜けて客室に向かう。

「運転を任せます。直接私が女性兵士に戦う心得を伝えます」

客室に入ると女性兵士がイリにエールを送るが、いざ今後の作戦を伝えると熱狂が冷めてし

まう。ある女性兵士がおもむろに切り出す。

「車掌のアドバイスの方が具体的でわかりやすい」

特急ウク・ライナーに連結されている武装車両の使い方や負傷した場合の救護設備や医薬品

や生理用品、そして弾薬などの備蓄車両、果ては食糧の確保方法つまり駅弁の購入方法などき

め細やかな説明があったようだ。

「車掌は今どこに？」